

袋井市総合教育会議 会議録（要旨）

会 議 名	令和 6 年度第 2 回総合教育会議
招 集 日 時	令和 7 年 3 月 24 日（月）午後 1 時 30 分
会 議 時 間	午後 1 時 30 分から午後 3 時 06 分まで（1 時間 36 分）
場 所	教育会館 3 階 ICT 研修室
出 席 者	大場規之 市長 鈴木一吉 教育長 鈴木万里子 委員 大谷純應 委員 溝口知秀 委員 吉田陽子 委員 （計：6 人）
欠 席 者	無し
傍 聴 者	無し
当局出席者	石黒克明 石黒教育部長 小澤一則 教育監 荒浪 健 子ども未来課長 神田明治 学校教育課長 白澤 崇 歴史文化館長 山本 浩 教育企画課長 長谷川美徳 教育企画課参事兼教育総務係長 廣岡 真理 教育総務係主任主査 （計：8 人） （合計：14 人）
会議に付した 事 件	別紙「令和 6 年度 第 2 回袋井市総合教育会議次第」のとおり

令和6年度 第2回袋井市総合教育会議 次第

日時：令和7年3月24日（月）

午後1時30分

場所：教育会館ICT研修室

1 開 会

2 市長あいさつ

3 議 事

袋井市の未来の教育像について

～大切にしていかなければいけないこと～

次期総合計画策定に向けて

(1) 子育てについて

(2) 教育について

(3) 文化振興（歴史・文化）について

4 閉 会

1 開会

●石黒教育部長

ただ今から令和6年度第2回の袋井市総合教育会議を開催させていただきます。会議に先立ちまして、会議録の署名人について事務局から提案をさせていただきたいと思います。鈴木委員と大谷委員にお願いしたいと存じますがよろしいでしょうか。

(賛成の声あり)

2 会議録署名委員の指名

●石黒教育部長

鈴木委員 と 大谷委員 を指名

3 市長あいさつ

●大場市長

皆様、こんにちは。

本日は、お忙しい中、第2回目の袋井市総合教育会議にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

皆様には年度末ということで、小学校やこども園、そして、小中学校の卒業式を御担当いただいて、子どもたちを送り出していただきましてありがとうございました。

また、日頃から学校内、子ども園、幼稚園等での子ども達の指導に関するアドバイス、そして、家庭内における様々な教育上での課題や困り事を含めて、ご指導、アドバイスをいただいておりますこと改めまして感謝申し上げます。

総合教育会議でございますけれども、袋井市の未来の教育像について 大切にしていかなければいけないことを今回テーマにさせていただきました。

現在吉田委員も参画していただいておりますけれども、袋井で策定を進めております第3次袋井市総合計画がございます。この計画は、令和8年度から令和17年度までの十年間を前期後期とした計画でございます。袋井市がまちづくりを進めるにあたり、最上位となる重要な計画でございます。市民が将来にわたって、安心・安全に暮らし、特に、未来を担う子ども達が幸せに暮らせるよう、こどもや子育て家庭を支える仕組みや、教育環境づくりを推進するとともに、地域、事業者や各種関係団体及び行政をはじめ、地域で生活するすべての方が、子どもや子育て家庭の声に耳を傾け、子どもの未来のためにできることを考えることが大変重要であると考えております。

総合計画では、教育委員会が所管する分野としては、「子育て」、「教育」、「歴史・文化」の3つの部門がありますが、本日は、この分野を中心に、袋井市の未来の教育像について教育委員の皆様方と、屈託のない意見交換をさせていただきたいと存じます。

私も皆様も意見交換の中から、多くの学びが得られれば良いと思っております。議論を楽しみにさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

●石黒教育部長

本日は袋井市の未来ということで、総合計画の第3次を作っておりますが、教育委員の皆様には基本構想の内容を見ていただいて、今度更に年度を跨ぎまして基本計画ということでより細かな施策を詰めていくことになりますが、本日は教育委員、市長の会談の中で、先ほど申し上げました「子育て」、「教育」、「歴史・文化」この3つの大きなくくりが教育委員会の所管でございますので、この3つごとに委員の皆様の考えですとか、思いを市長と共に意見交換をしていただきたいということでございます。限られた時間でございますので、私の方で少し進行の管理をする中で進めさせていただきますが、委員の方々にはより積極的な御意見をいただきたいと存じます。それではここからは大場市長の方に議長となって進めていただきますので、よろしくお願いします。

3 議事

●大場市長

それでは議事に入ります。本日は3つの分野に分けて進めさせていただきます。まず初めに教育委員が御自身の関心事や考えなどお一人およそ2、3分で話をさせていただいて、そののちに私からの考えを述べさせていただき、そしてさらに、意見交換を行うという形で進めたいと存じますので、よろしくお願いします。

初めに「子育て」分野でございますが、第2次総合計画後期計画では政策1「子どもがすこやかに育つまちを目指します」と本編にしるしがしてありまして、この内容につきまして関連した意見交換の形で進めさせていただきます。

それでは、鈴木委員から順にお願いします。

●鈴木委員

私は各論ではなくて、総論と思っていましたので、それぞれの分野では考えて来なかったのですが、「子育て」というところで、先日若草こども園の卒園式に出向いてとっても感動してきたのですが、若草こども園は外国籍の子どもも多いし、家庭的にいろいろ抱えている子とか特性がある子どもが多いところだと思うのですが、本当に感動したのです。子ども達がひとりで、集団で動きながら証書をもらい、堂々としている姿に。今回事前に参考資料でいただいた「子育て」の弱みが前からこの資料で気になっていて、弱みとして「増加する発達障害、外国にルーツを持つ児童・生徒への対応が不十分」これを弱みとしてとらえている袋井市はダメだなあと思っています。これを弱みとしてとらえるのではなく、これを何とかしようというバリアフリー的な考えしか生まれてこないんだけど、これを強みとして考えたら、これだけ多くの多様性に富んでいる人達がどうしたら生き生きとしてできるかというところを考えていく事が大事で。若草こども園は証書を裏返しでもらっています。そのまま後ろを向いて、そうすると親の方を向いた時に証書の中身が見えて、ありがとうございますという言葉を言う。多分ひっくり返すのが大変な子とか、卒園式、卒業式ってとっても緊張する場面なのですが、それを大変な子がいるからこそみんなができる方法がないかと考えて、それがインクルーシブ教育だと思うのですが、そういう姿が見られたのと、間が空いて子ども達が立っていた。ちょっと間が空くなあと思ったらグループで動くようにしている。ひとりでは大変だけどグループだと隣の子がちょっと声掛けして、支援員さんが台に上がるところを台の後ろに立って安全面を見ているんだけど、その他では全

然出る場面がなく、本当に子どもがちょっと間が空いても周りが待っている。これから袋井市はそういうところを大事にしていけないといけないのではないかなあと。とっても感動しながらこども園の卒園式を見たので、是非多様性、袋井市は外国籍の子も多く増えているし、特に幼児教育の環境整備がそういうところでそういう子達が生き生きとできるようなそういう子育てがあったら優しくなるのではないかと、それを一番感じました。

●大谷委員

おそらく総合計画そのものの事なんですけれども、現実には我々が施策をしている中で、今回は子育て、教育、文化振興ということだといったとしても、やはり最終的な目標というのは、実はそこをひとつの足掛かりと切り口とした、この袋井が持続的に発展していく事のための施策だと私は思っていて、それは当然皆さんが例えば、子育てとか教育とか文化振興とか、そこに要するに、関わってくるいろいろな人が幸せになってこのまちにずっと住み続けてくれるということが、実はさっき言った持続的な発展ということだと思いますけど。そう意味において、例えば子育てっていうことになると、データを今持ち合わせていないのですが、実は袋井は若い方達が多い、若い方達が転入してきてここに住まわれるというイメージですが、実はある一定の時になると転出をしてしまっている若い方達。子育てが始まる頃だったりとか、ある一定の時期になると実は磐田だったりとかへおそらくそうではないかと僕は思っています。一体この原因ってどこにあるのかということをしつかり探っていかなければいけないのですが、確かに袋井市は実施しているものに対しては、比較的手厚かったりちゃんとしている部分で多いと思うんですけれども、そこまでは全てについて行きわたっているかというとなかなかそれは難しかったりするのではないかと。これから家庭環境が複雑化して、例えば、シングルマザーとか、シングルファザーとかだけではなくて、もしかしたらお父さんお母さんが居なくて育てられている子どもとかも増えていく。お子さんも恐らくいろんな意味で多様化していくと思います。友達とワイワイすることの方が得意な子もいれば、そうじゃなくて自分ひとりでコツコツやるのが得意な子もいるし、コミュニケーションがすごく得意な子もいれば、コミュニケーション自体、こういう会話によるコミュニケーション以外のものが得意な子、いろんな多様化がする中で、お子さんひとり一人に多様化するもの全てに対応していくのは難しい、すごく困難なのかもしれないんですけれども。恐らくそういうところで、しっかり行き届くことができれば私はとどまってしまう。さっき言った持続的な発展というのは、人がここにとどまり続けて何世代にも渡ってここで住んでいきたいと思わせるようなものがここになきゃいけないと思うのです。法整備という言葉が固くなってしまうのですが、行政がやらなければいけないセーフティーネット作りもあると思います。恐らくここで持っている地域力。特に、昔は地域の受け皿がものすごく厚い時代だったのかなあと。それってもう少しうまく施策の中に取り入れていくことができればですね。これから先っていうのは、お金の面でも行政単独でやっていくセーフティーネットが僕は難しくなっていくと思っている。もう少し地域の包容力というのをうまく生かしていく事ができればもっと地域全体で子育てをしていくという8万しかない地方の小さな都市なんですけれども、袋井らしい子育てというのができていくのではないかなあと。総論としての意見です。

● 溝口委員

今の状況という、子どもが減っています。お年寄りがどんどん増えている。働く人は減る。どうやって労働人口を増やすかがいろんな事が考えられている。子どもについても。そういう中で子育てを考えていかないといけないですが、子どもが減っているというところがその分厚くみれるのかもしれませんが、核家族が増えている、大谷さんも言っていましたけど、地域の方との繋がりというよりも、自分の子どもは自分で休みの時などは面倒をみる。その辺で遊ぶのではなくて、子どもを遊園地へ連れていくといったそういう御家庭が増えているのかなあという気はしています。ただ、いろいろ今まで小学校、中学校、幼稚園とかを回らせていただくと、まだまだ袋井市は地域との繋がりがすごく深い地域があります。だいぶ薄れてきちゃったかなというところもあります。そこはすごく袋井市としては強みだと思うので、これから如何にお年寄り、働けるお年寄りは働いて欲しいと思いますけど、ちょっと動きづらくなってきたお年寄りとか、中には時間的に余裕があるお母さん方達。そういう人達を如何に地域の子育てとして活躍してもらえるかそういう施策が必要かと思っています。子どもさんを持っている親としてもなかなかそこに自分達で入っていけない親が多いと思うので、そこが何か施策として何とかそういう人達にお手伝いしていただける袋井にしていくなったら良いなあと思っています。

● 吉田委員

今回の議題は、「大切にしていかなければならないこと」という副題が付いていて、私自身は上の子が2歳の時にこちらに引っ越してきて12、3年ここで子育てをしているのですが、振り返った時に袋井の子育て施策に対して大きな不満を持ったことは実な無いのです。生活のしやすさの状況というのがあるのですけれども。何でそんな不満を持たなかったのかと思い返した時に、人との繋がりが心に強く残ってしまっていて。特に幼児期の家庭に籠りやすい時に子育て支援センターに行ってそこで友人ができる。また、プロの職員さんにみてもらった、アドバイスをもらった、そういった経験がすごく私の子育てを支えてくださったんですね。そういった中で、今後大切にしていかなければならないと思うのは、支える側の人材を大切にしてもらいたいなあと思っています。今は割と無償化ブームというか、何でも無償化無償化と言っていますけれども、それってサービスを受ける側によっては良いかもしれないけれども、提供する側ってただでさえひっ迫している中で、提供する側はやっぱり守られていないと先細りして行き詰ってしまうと思うんですね。子育てを支えている幼稚園やこども園の先生とかが余裕が無いとどうしても子育てしている当事者も追い詰められてしまうのです。なので、支える人材側の方も、例えば給料の方の待遇面もそうですけれども、それだけではなくて、今幼稚園を回っているとほんとギリギリの人員配置でやっている。何かトラブルがあった時に、どうしても先生たちのマンパワー全員でどうにか回っている苦しい状況や思いを良く聞いていまして。困った時に教育委員会にいる人材を直ぐ派遣できるとか、助ける仕組みというのを作ってもらいたいなと思っています。とにかく支える人を大事にして、働くなら袋井市が良いよねと思ってもらえるようなまちにして欲しいなと思っています。

● 大場市長

今教育委員の皆様からお考えをお話しいただきました。私からも自らの考えをということですので、皆さんの考えをお聴きしてということではなくて今の袋井市の教育の関係で何を思うかという、親と子の関りが今後どうなっていくんだろうなということを変えて考えることが多かった。とりわけですね、皆さんのお話しの中から地域と子ども達の関りが非常に少なくなっているという話もありましたけれども。確かにその裏返しなんでしょうけれども、子と親の関係というのがものすごく密度が濃くなっている昔に比べて思います。その1つの現れとして、私のところに小学校、中学校、高校等で全国大会に行きますとか、県大会優勝しましたみたいなお子さんが表敬訪問にたびたび来ます。そういうお子さんって非常に多くが親御さんがテニスをやっていたからとか、お父さんがマウンテンバイクに興味があるからとかですね、親御さんの影響を受けて自身のスポーツであったり、暮らし方、生き方まですごく影響を受けているなあといろいろなところで感じています。昔は、そういう子もいましたけれども、それ以上に周りの先輩がやっていたとか、地域で盛んなスポーツがソフトボールだったとかで、そういうことで興味を持って県大会へ行きましたとかいうケースが非常に多かったと思うんですよ。要は、社会からの影響を子どもが受ける率が高くて、家庭というよりも地域だったのが、ダイレクトに子と親の関係がものすごく濃厚、濃密になっているというのを子育てからそうした教育の方向性まで子どもの生き方まで。例えばピアノなんかもそうですが、そう感じています。それが良いとか悪いとかではないんですけれども、ある意味濃密な親子関係というのが子ども達の教育にどう影響するのかということを考えることがあります。これは単にスポーツだけではなくて、考え方や暮らし方だったりとか生き方だったり、物の捉え方だったり、恐らく全てに密度が高くなっているんだろうなと思います。要は、純粋培養液の中でその親の方向性の中でスクスクと育っていくといくことだと思うのです。我々の子どもの頃は良いとか悪いのではなくて、地域の影響を受けましたということを申し上げましたけれども、やはりいろんな人に会っていろんな話を聴いて、いろんな魅力を知っていろんな可能性に触れながら育っていくことが子ども達に迷いを与えたり、大変さもあるとは思いますが、子ども達が取捨選択をして、そこから多くの物から自分の学びを積んでいくっていう、自立するための純粋培養液ではない雑多な中から自ら何を選び出すのかという生きる力みたいなことをそこから学んでいったと思うんですけれども。それが無くなっていくことが非常に気になります。今後どうなっていくのかということを含めてなんですけれども。それと、委員の皆さんのお話しを聴いていると、地域との接点が無くなって地域の協力が無くなってきているというこのお話もありましたので、私達は公の教育の中でそういったことをどうやって子ども達の育成を考えていけば良いのかというのを、皆さんからももしよければ伺いたいできればなあと思うところがあります。私の課題感というか、感じるところでありまして、答えが無いかもしれませんが御議論いただく上の1つのきっかけとして私が考えているところでお話しさせていただきました。

5名様々な意見が出ましたけれども、そうした中から皆さんどうですか御意見があればどうぞ。

●鈴木委員

今親と子の濃密なのという話があり、確かにそういう一面があるのと、逆に自分が保護司をしているのですが、問題行動の子も袋井市増えている。県下でも多いのですが、逆に、それが全然無い子達の2極化。昔は地域で育てられたという文化が今は無くなってきているなあと市長さんのお話を聴きながら思っています。地域がどう子ども達にできるかという、関わったら関わっていききたいのですけれども、なかなか難しいのですが。私は小学校のボランティアを皆さんにお願いをして入ってもらっていて、一度入っていくと、子どもからの報酬っていうのは子どもからの「ありがとう」や子どもの姿なんですよ。あとは、学校の先生が「ありがとう」と言ってくれるのでまた励みになる。そういう面で、そういう機会をできるだけ増やしていくというのは大事なのですが、地域全体が組織に入りたがらない。子どもだけではなくて高齢者も各でしかないというところが課題かなあと思っています。2極化しているというのが課題かなあと思っています。

●吉田委員

地域がどう子育てに関わっていくかといくことで、地域ってすごいざっくりとした言い方なんですけど。地域を担う人材自体が不足しているような気がしてしまっていて、余力が無いというか、自分だけで手一杯な人が割と多くて。私達世代は特に現役世代なので、仕方がないのかもしれないですけども、あまり余計なことはしたくない。責任を持ちたくないという方がすごく増えているなあと感じていて、ボランティアとかも参加するのは良いけど主催は嫌だみたいな。引っ張っていく力がだいぶ弱っているのかあという課題を感じています。解決策ではないのですが。

●大場市長

今日文化協会の会長さんと面談をさせていただいたんですよ。文化協会の1つの課題として、後継者不足なのですよ。何とか文化協会という組織を維持しなければならないけれども、協会という大きな器もさることながら、文化協会は、例えば折り紙教室とか、手芸教室、写真教室とかいろんな会で成り立っている組織なのです。この会そのものも後継者不足で世代交代ができないという課題を抱えているという話がありました。そのとおりなんだろうと、いろいろな集まりに行っても若い人がいなくてというのが二つ言葉でどこに行っても聞くわけですよ。じゃあ若い人はどうしているんだろうと。若い人達はネットで知り合った、例えば同じ趣味の人達で知り合って、好きな活動をする。そういう意味での積極性はあるのだけれど、既存の枠組みに入っていくのは嫌がるし、それがそこで役が与えられようならもっと嫌だしということがあって、どちらかという、緩やかな繋がりの中で好きな物だけやっていたい。自分から取りにいくんだけどがつつと取りに行くんじゃないで、初めはおっかなびっくりやっていて、もし合えばそれが自分のレベルや関りが高まっていくというそういうことなんでしょうけど。それに対して、きちっと器のような形で決められたところへ入ってそこに従って、場合によってはルールがあって、そういうのがある意味与えられるものに対する抵抗それがすごく感じるんですよ。自分自身もそんな好きではないし、嫌な方だと思いますけど。世代的に年齢が下がれば下がるほどそういう思いが強いのかなあ。その代わり同じボランティアでもこれをやりなさいという形での奉仕作業はやりたくないけど、これをやりたいと思ったものは徹底的に時間を

惜しんで、金もかけて徹底的にやりますと。こういったものの違いって何だろうと。同じ無償の労働提供、奉仕、ボランティアなのに何が違うんだろうと。きっかけが非常に大きいんでしょうけど、その辺りのところが社会の変化、そしてそれがまた段々まわりまわって教育への影響になっているといえると思うんですよね。一朝一夕にこういう教育環境をとは言いきい。私達の暮らしから影響を受けるような社会構成、社会に対する捉え方になっていくんだろうか。果たしてそれをどういう形で教育に反映していくのかという出口を考えた時にどうしたら良いのかというのは実は本当に難しい。特に社会教育というようなところを含めて考えると難しいなという気がします。

●溝口委員

P T Aの方も段々加入しなくなっている。が、人は集まる。P T Aという名前ではなくて、ボランティアという名前だと人はいっぱい来てくれている。我々世代もそうでしょうが人を上手く使うとか、人と繋がってこの人が言うのなら仕方がないかなあというそういう繋がりが無くなるというか薄れてきている話ができる人が減ってきているのかなあと思います。地域の話ですけれども、教育委員会の仕事をしてからずっとどうやったら学校の門扉を一日中開けられるのかなあとずっと考えていたのですけれども、なかなか良い思いが無い。あそこが閉まっていると我々ですら入りづらいです。年寄りが学校の中で散歩しているような姿も見ない。何とかそこを開ける手はないかなあと思っていたのですが、結論が出ない。袋井の小学校、幼稚園、中学校はオープンですと。そうすればもう少し地域の人もきっかけが作れるのかなあという気はしています。

●大場市長

その門の件は本当に私も思うところがあって、振り返ると池田小学校事件が起こって、それで不審者が入らないようにということで門を閉めるようになった。門を閉めるようになったのは良いけれども、今度はギリギリに駆け込んでくる子ども達がいて、その時に挟まれて。だから最初から閉めておく。ずっと時間が来たら閉めるということではなくて、最初から閉めておくという。事故が起こった以降、全国の学校で門が閉まるようになってしまった。言葉としては、開かれた学校教育を、地域と連携した学校教育をと言っているのだけど全然開かれていない。本当に矛盾を感じますよね。

●鈴木委員

今言われたように全部が閉まっているわけではないです。袋井南中学校は常時門は開いています。

●吉田委員

山名小とかは児童1人くらいが通れるくらい隙間が開いています。

●鈴木委員

閉まっていると入りづらいよと校長先生へお話ししたのですが、やはり安全上そこは譲れませんかと言われて。

●大谷委員

皆さんミセスグリーンアップルというグループをご存知ですか。「ケセラセラ」という曲があるのですが、2番の歌詞にあるのですが、人ってよっぽどでなければひとりってことはないんですよね。市長が先ほどおっしゃられた親と子の関係、例えばお母さんと子どもの関係がすごく密になっていくというのは仕方がない。親もひとりっ子で生まれていて、子どももひとりしかなくてというと、お母さんだって自分がどう子育てして良いのかわからない中で子育てをしてきた中で、じゃあ狭いアパートやマンションの中で子育てしててどうして良いのかわからない。昔だったらいろんな人と交わっていていろんな接点があった。母親と子どもしかいないのだからどうやっても関わる時間が長くなっていく中で、そこって接点なんです。先ほど先生が接点が無くなっていると言われましたけど、悪い子達は悪い子達の接点を見つけていて。もしかしたらそんなに密な接点、地域としての関りはしたくないというところもあるのかもしれない。何も接点が無くて、誰とも交わりたくない、そういう個性の子もいるのかもしれないですけども、人ってどこかで誰かと繋がっていたいという思いがあると思うんですが、もしかしたら繋がりと繋がりが小さな繋がりでも良いしどんな繋がりでも良いのですが、その繋がりというのがちゃんと見つけられる社会だったら良いなと。もしかしたらですよ、いろんな情報があってこれどこで聞いたのかわからないんだけど、とりあえず今はチャットGPTとかの方が良く答えてくれるのかもしれないですが、何かこれわからなかったら昔だったら自分のお母さんが教えてくれるとか近所のおばちゃんが教えてくれたりとか、ちょっとでも何かあった時にどこかにコネクトできるコネクト作りは行政がもっと積極的にやっても良いと思っている。実はこのコネクトを作るのは簡単だし、そこら中に転がっているのだけれども、それが玉石混交というよりは薬だか毒だかわからないコネクトがいっぱいあるので繋がっていけないところに繋がっちゃうと大変なことになっちゃうしというところで、選別というのができるのが恐らく一番信頼があるのは行政ではないかと思っています。市長も言われていますが、いろいろなものがこんなに低速化が進んでいる中で、チャットGPTに聞いても答えてくれるんだけどそうではなくて、ここを見たら何かわかるとかここに行ったら何か自分が寂しい時に繋がりがあるというのがそういうものが少し整備されていくとまた違う縁が生まれてくるんだけど、それがコアじゃなくて良いと思うんですよ。僕らも幼稚園の時から一緒だった奴が今もずっと一緒にいるかということとそんなの一人か二人しかいませんよ。どっかで人間って何かしらの関係があって繋がりができていく。いろんな繋がりがあったらその繋がりがここで生きていきたいという希望だったりとか、思いに変わっていくのではないかと、そのコネクトを作る役目が行政ではないかと思いました。

●大場市長

では、次のテーマ「教育」分野について大谷委員から順にお願いします。

●大谷委員

お子さん達が多様化している中で、お子さん達が学校という大きなフィールドの中に集められて、その中でみんなでいろんなことを覚える。これは勉強だけでなく集団の中で

自分がどういう立ち位置で自分は関わっていかねばいけないうのかを含めていくのが昔の学校だった。それは個々の多様性とかを尊重しながらやっていかねばいけないう。必ずしも集団で教えるということ自体が全てではなくなる。その強みは強みで。しかし、集団に入っていけないう人もいる。子どもが勉強をしたり、子どもが教育を受けたいというのはいは子育てもそうなんです、フィールドとしてはいろいろな部屋ができてきているのはいはかと。そこで重要なのは、部屋は扉が1つしかない。フィールドが良くて部屋がだめではなくて、仮にそこで小さな部屋でしか教育を受けられないうとか、或いはそっちが良いうという選択肢があつた時に重要なのは扉が1個ではなくて、どこか全然違いう所へ繋がっていく扉が開いていたりとか。或いは、全然違いうフィールドに繋がっていたりとかという扉を作つてあげられる環境がこれからの教育にできてくるのはいはかと。出口に繋がっている部屋は1個ではない。自分が入ってきた扉だけしかないと思つているのはいはかと、良く見たら全然違いうところへ扉がついていてそこから出たらすごいうところがあるなというところの可能性とか、否定をしなかつたりするというのが、集団で今までどおり教えていくという当然の教育というのにも必要な一方で、そう一つは、部屋にいる子達にとってはいはあなたが入ってきた部屋は扉が1個ではなくて全然違いうところへ扉がついていますよとか。穴を掘つていつたらすごい広いうところへ出ますよとかということの可能性としてちゃんと残してあげ、教えてあげることが教育の中で必要なのかなと。今仮想の中で作るとかもあるが、そういうことではなくて。全日制の高校へ行かない選択肢でも違いう扉がついているのかもしれない。少なくとも15歳で終わるのはいはかとなくて18歳とかもう少し上までいっても良いうところまで考えながらで良いうと思うんです。ちゃんと人とコミュニケーションが取れてちゃんと学校に行くことも良いうとは思いますが、そうではなくて違いう扉のところへ行つても良いう。人生に扉が無いうのではなくて、ちゃんと扉が見つけられるようにしてあげられるのがこれからの袋井の教育ではないのかなあと思つています。

●溝口委員

夢の話をして。先生も大変ですから、もっと余裕を持つて欲しいのですけれども、これ以上余裕を持つてというのにも難しいというのが現状。人が足りないその一方で、年寄りが増えてくる。こういうのを全てまとめた形で、良いう方向はないかというのが1個理想です。それは、幼稚園、小学校、中学校、子育て機関、全てにまちじゅう図書館も、可能なら喫茶みたいなのでコーヒーが飲めるというのが併設されているというのが、市内をそういう施設を循環するバスがいっぱいある。そうするとお年寄りが働けなくて行き所がなくて知り合いうの人を探しながら散歩している年寄りがそのバスに乗つたり、お母さん方がバスに乗つたりして学校でも幼稚園でも図書館でも行ける。そこでお茶をしている人、学校で草とつているおばあさんがいる。その喫茶とか図書館とかではモニターで自分達の子どもの授業の様子が見える。子どもは授業が終わつたら一緒にお茶しながら勉強もできて地域の人が勉強を教えてあげられる。こんな夢物語ができないかなあというのを考えています。

●吉田委員

具体的ですが、子どもの心を守る教育をしてもらいたいと思っていまして、弱みとして学力の向上とか言われていますけれども、今「SEL」という考えがありまして、

「Social and Emotional Learning」といって、その学びに向かうための姿勢や土台作りが大事だという考え方なんですけど、子どもの心が安定していないと学びが見えない、付かない。例えば、クラスに心理的な安全性が無い状況だったら、どんなに教師が一生懸命教えたところで子どもは受け取れ切れない、学びに結びつかないという考え方なんです。今の学校で子ども達が本当に安心を感じて、居心地が良いと思っているのかというと、ちょっと私は疑問を持つところがありまして、その一例なんですけど、いじめ対応に袋井市はもう少し力を入れてほしいと感じています。なぜかという、いじめられた子が、これはいじめだと思うと学校に言ったところでそれはいじめではないと思いますということで返されてしまう、守られていない。そういった状況で、子ども達って安心・安全に勉強に向かえないですよね。なので、いじめ対応をもう少ししっかりしてもらいたいと思った時に、全国の先進的な事例や取組がないかなあと探したら、大阪の寝屋川市でいじめ対応の先進的なことをやっているのですが、教育委員会とは別に市長の直轄で「観察課」というのを置いているんです。ここはいじめ対応を専門に扱うところで、教育委員会とは独立している。そこにケースワーカーだったりとかがいるんですけども、市長が加害側の児童生徒の出席停止を勧告できるとかいう割と強い権限を持っていて、その観察課もいじめの捜査権まで持っている。いじめというのは人権侵害だと。市民同士のトラブルであるという位置づけで扱っているんですって。どうしても学校だと、もちろん被害者を守るんですけど、加害者側も守るべき人っていうのがあってどうしても強くいけない。そこで事勿れでもっていこうとするのが学校の基本的な姿勢に保護者からは見えてしまうんです。そういった時に、教育的アプローチではなかなか解決は難しいかなと思った時に、第三者の権限を持った組織が入ることによって解決する。そういった組織があるというのはいじめは許されないことだという強いメッセージになると思うんです。もちろん今でも、現場でいじめは許されないことですよというのはいっぱい言われているのですが、現実としていじめの加害者が見つからないままに進まない事件とかもありますし、それじゃあやり逃げとか加害者が本当に悔い改めるのかという機会も失ってとても良くない状況だと思うので、そこはちょっとフォローを積極的に対応するという姿勢が袋井市には欲しいかなあと感じています。

●鈴木委員

皆さんの言うとおりでと思います。大きな課題として、いじめとか不登校とかあると思うんです。その時に不登校の子に対してのいろんな機関を作ったりとか、指導ルールとか、そういうシステムとかハード面は施策としていろいろやってもらっているし、いじめも。だけど本当に子どもが学校が吉田委員が言ったように、安心していられる場所なのかと。そこに子どもが居づらさを感じているのではないかと頭に入れると、もっと多様な機関、さっき大谷さんが言った扉の部分もそうだし、もっと柔軟性のある施策を作っていくし、人として心のつながりが大きいかなあと感じました。大切にしたいのはインクルーシブだと思います。特別支援に力を入れて特別支援学級とか通級指導教室とか。その子のある面必要な時もあるけど、そうではなくてもっといろんな多様な子が学級

の中にいるんだよという中から学んでいくことがすごくあると思うんですよね。インクルーシブな教育を進めていってほしいと思いました。卒業式で市長さんの言葉に感動したのですが、いろんなチャレンジをしてきた。チャレンジができる学校ってそういう空間でいたいし、それを何度でもやり直しを認め、応援する周りの大人が子ども達の周りにいっぱいいるっていうそういうのが理想だし、子どもは居やすいのかと思う、袋井市は地域でもそれぞれの個性があり、それを活かしながら、もっともっと柔軟に自由に学校教育ができるとうれしいなと感じます。

●大場市長

それぞれお話しが出ました。私は子どもの頃に一日風邪で例えば休むと算数でも国語でもその部分が抜け落ちちゃうんで1日でも休んじゃいけない。逆に言うと、もし休むとあの時の一日休んでしまっただけでこの後1日がどういう影響を与えるんだろうと心配になったこともありました。自分は休まないようにできるだけ学校に行こうという姿勢でいました。しかし、大人になって自分が民間の教育関係の仕事をしていると不登校であったり学校に行かない子もたくさんいて、自分が子どもの頃あの一日学校へ行かないことにこだわったことがなんだったんだろうかというのをすごく考えることもありました。何でかということ、不登校で学校へ二年、三年行けなかった子達も立派に大人になって、みんなが憧れるような大人になって生活している、立派な日々を送っているという。でしかも、自分は民間の教育をしながら、その子の家庭も見ている。確かに、小学校とか中学校とかで何年か行けなかったことがあったけれども、高校でリカバリーしたとか、そういう成功事例とかもたくさん見た。特に自分は、リカバリー留学で海外へ行って遅れた分を海外で取り戻すみたいなこともやっていたので子ども達ってすごいなあ。そのハンディを乗り越える力もすごいし、昔の欠落した部分をどこかでしかも短時間で穴埋めできるし、その可能性を思ったのですけれども。では果たして自分はどうだったかというと、ほんの一日とか二日とかですごいこだわってそれを何とか作らないようにしていました。この違いって何だろうかということと、同時に、子ども達には一日二日とこだわらなくても良いよ、全然大丈夫だよという安心感が全ての子ども達、自分が当時だった子どもだった自分に与えてあげられたら、もっと自由で、もっと平和で、もっと可能性のある自分になれるかもしれない。人による捉え方はいろいろ違うんでしょうけども、二年三年休んでしまった子達はもっと不安だと思うんですよね。その子の性格にもよるでしょうけど。この二年、三年取り戻す。僕は、私はこんなに休んでしまったともう取り戻せないかもしれないと思っている子達がたくさんいると思う。でも実際そうではない子達がたくさんいることを自分は見てきたし、経験の中で育ってきたので、そんなことは心配しなくても良いんだよという機会がある子には伝えられますけれど、そういう子達はそう多くはない。先ほどの子ども達が子どもの心を守る教育や見守ってあげる環境とかは大事だというお話がありましたけれども、そういう意味での安心感。教育課程で欠けた部分とか、生活上みんなと一緒にできなかった部分があっても、全然あなた心配することはないのよという意味での心の安心感。そういうのを与える機会があると良いなあと思うんです。それは休んでしまった子もそうだし、昔の自分みたいにほとんど休まないで一日二日だけだけどすごい悔やんでいる子達もいると思うんです。そういう子達もトータルでとにかく休もうが休まないようが大丈夫

だと。安心しなさいと。要は、自分が安心して生きていけば良いんだという安心感を与えられる教育が良い。それをどうやったら良いのかが課題ですけれども。意見交換をお願いします。いじめの話もありました。袋井としては第三者機関も設けていて、教育委員会とも独立しているので市長直轄のがあることはあります。ただ、それが市長直轄のという事を声高に言っているわけでもないし、それを大きく見せているわけでもないですけれども。いじめがあって、そうした対応する内容になれば、それはそうした組織が第三者組織として対応しているというのは袋井市でも同様ですが、それが他市と比べて劣っているということであれば改善しなければいけないと思います。

●吉田委員

袋井市の第三者委員会というのは、直接児童なり保護者がアクセスすることはできるのですか。

●鈴木教育長

制度上は重大事態の時の調査委員会というのは法律上で求められていて、重大事態の時。教育委員会の組織は常設の組織を持っていて、そこは基本的にはその人達主導で調査が必要なら調査をしますよという形になります。その調査結果に不満な場合があるというその時は市長が直轄する第三者委員会がまたあります。つまり二重の構造になっています。学校の調査、教育委員会の調査があって、なおかつ、教育委員会が持っている専門委員会という組織があって、そこは第三者の姿勢が確保されています。その結果にも不満となったなら、市長のところへ行って市長が再調査をするということで、それは法律で求められている機関なので、市長のところの第三者委員会はおそらく常設ではなくてそういうことがあった時にあらためて任命するという形です。

●吉田委員

できれば重大事案まで行くともっとこじれて大変なことになっているので、素早く入るところを目指していただきたい。

●溝口委員

寝屋川は条例まで変えて積極的に動けるというふうにはしているんですよね。

●吉田委員

保護者が直接相談できる。

●鈴木教育長

多分、全国いろいろあると思うんで、そこはメリット、デメリットも両方あるはずなのですよね。多分調査をしてどんな体制が良いかということを考えていけば良いかと。

●鈴木委員

重大事態っていうふうに認識するというのが学校なのか。

●鈴木教育長

基本的には学校ですけれども、学校が重大事態ではないと言ってもそうではないだろうと、市の教育委員会では言います。

●鈴木委員

保護者は重大だと思っているけれども。

●鈴木教育長

私共とすると、重大事態であろうがなかろうが、いじめは加害者と被害者となるので、どんなケースであれ、やっぱり速やかな解消が必要だと思います。重大事態というのが不登校で30日欠席だとか、いじめが原因で、心身の状況に現れるなどの定義はありますが、重大事態になったからとどうだこうだといった話ではないという気がします。その体制についてはまた改めて。

●大谷委員

確かに、吉田委員がおっしゃったとおりで、安全の確保がまず第一ではないのかと。市長もおっしゃったが。身体的な安全の確保もそうですが、気持ちの上での安全の確保というものまずいじめの場合は被害者が安全を確保できるということがまず大切ではないかと。そのあとどう対応していかうかがすごく難しい。先ほどおっしゃられたとおりで、抑止力になるから慎重に厳格化していけば良いのかとか、加害者は悪いんですが、その辺りが子どもの場合ってどうしていたら良いのかと。大人の世間だったら、悪い方は断罪されますよね、断罪ということなのか、もっと違う形でなのか。和解をすれば良いというものなのか。だけど、和解まで至っていないからこういういじめになりましたよと。些細なけんかではなくって、これはもう被害者と加害者と生じる事案になってしまったと。そうしたら、これはもう和解をしろと言っても無理だからあなたが悪いですよと、こうしないといけませんよと。こっちの子は大変でしたね、これは中に大人が入ってちゃんと解決するから安心してくださいね、ということになってきてということなのかもしれないですけど。被害者のお子さんが、最終的にどうなりたいかという事を聴くことができる体制が。システムの決まりだからこうだとか、被害者のお子さんが最終的にどうしたいのかに対応できるようなことが必要なのかと思いました。

●大場市長

他に御意見はいかがですか。無いようなら最後のテーマに移ります。時間がだいぶ押しています。「歴史・文化」の部門について、溝口委員から順にお願いします。

●溝口委員

さっきから出ているように核家族が進んでいて、子どもさんが袋井で文化に触れたいとか、袋井でピアノのコンサートがあるから行きたいとかいうのがなかなか袋井だと難しい。親もじゃあどこかへコンサートを聴きに行くというよりは、ディズニーランドへ遊び

に行く時代かなあという風に思っています。そういう中で文化振興を継続してやっていかなければならないと思うのですが、親達にもうちょっと心の余裕を与えてあげないと、とは思うものの、当分はそんな施策はないだろうなという風に思っていました。今も春や秋の遠足でどこかへ歩いて行っていると思うのですが、できるだけ小学校の遠足で、市内の法多山へ子ども達が行く機会を増やすみたいなことしかないのかなあと思っています。大人に関しては、良い文化を見せる機会を今も作ってくれているし、あるんですがなかなか参加できない、参加しない。そこの改善する良い考えがないのが感想です。

●吉田委員

総合計画審議会のところで、弱みのところで「文化技術に対する市民の興味関心が低い」というのが挙げられていたのですが、最近「体験格差」という本を読んだのですが、格差が生まれるのは当然経済的な格差によって子どもが体験できるものが変わってくる、数も変わってくるという話があったんですけども、では困窮しているギリギリな家庭が安いイベント、ワンコインで何かできるとか、ゼロ円で体験できるものに積極的に行くかといえば行かない。やはりそういうのに参加するのは、興味や関心がある余裕がある世帯なんですよ。それはなぜかといったら、情報をキャッチする余裕がそもそも経済的に困窮している世帯は受け止めきれない、スルーしちゃう。余裕のある親というのは、子どもにいろいろ体験させたいという気持ちがあるからそういうのをキャッチできるんですけども、なかなか目の前の生活でいっぱいいっぱいな人というのは、子どもに対しても最低限の生活を保障するので精一杯なんで、歴史文化というのはちょっと余剰的な余暇というところになるとそこまで意識がいかないという話があって。経済的な話だけでなく、親の意識という子どもに何を体験させたいかという親の意識はどこで生まれるのかといったら、先ほど表敬訪問の話でもあったんですけども、親が価値を認めているものを子どもにさせたいという形になるんですよ。親が価値をなぜそこに見出したかという、子ども時代に体験していたからなんです。そうやって世代ごとに再生されていくということなので先ほど溝口委員もおっしゃっていたんですけども、子ども時代に何を体験するか、どう体験させるかが大事になってくるのかなあと思っていまして、先ほどの経済的に余裕が無い方というのは情報すらキャッチできないというところを考えると、体験と子どもを繋ぐ支援というのが大事になってくるのかなあと思っています。袋井市もいろいろとイベントをやっているんですけども、そこに来る、参加する人は割と固定化する。そういった中で、子ども自身が情報をキャッチできるような仕組みがあったりとか。タブレットでイベントがあるよとかを子ども自身がキャッチできるのを作ったりとか。そういったただイベントを多発するのではなくて、イベントに参加できる人を増やす仕組みを作っていけたら良いのではないかなあと思っています。

●溝口委員

付け足しで、タブレットを子ども達がみんな持っているわけですので、そういう地域の情報とか文化関係の情報をタブレットに直接流すという手もないことはないですよ。そんな時代が来るのかもしれない。

●鈴木委員

吉田委員が言ったように、格差の問題ですが、私は学遊館の室内楽にちょっと関わっていて、うさぎホールは音楽的に一流の方達も認めるような良いホールです。でも、クラシックなんてやっても人は集まらないという課題があって、親の考えとか地域的な部分もあるのかなあと、距離的な部分もあるのかなあと思っている中で、浜松市はアクトでクラシックを全児童生徒に観せている、聴かせる。やっぱりそう子ども達が体験する機会を持って、いろんな事を体験する中でクラシックって面白いなあと思う子もいるかもしれないし。私は中学の時に狂言を観たんです。学校で講演をする機会あって。そういう文化的な体験というのをしてどこで興味を持つかかわからないのだけど、とりあえず全員の子にそういう体験をさせたいなあという風に思っています。タブレットを使ってという情報発信、袋井市もSNSでいろいろイベントの発信をしていて、中学生辺りはそういうのを見ていると思うんですが。その発信は続けていくことは必要かと。最近感じるのはうさぎホールで観ていて、子どもが出ているものは満席になる。こういうのを子どもに観せたいなあというのはガラガラだったり。こういうのに関心を高めていくこと、そこが高まっていくことがいろんなことに高まりが出てくるのかなあと感じています。子どもに文化体験はさせたいと思っています。

●大谷委員

文化振興というのは、社会全体が安定していることだと思っています。個人的には、楽しい人生を送るためのものであったり人生そのものの幅が豊かになったりするためにそういう文化があれば良いと思うのですが。我々が考えなければならないことが我々がカルチャーとして定義しているものは文化ですよ。主流の方です。実はカルチャーと定義しているものが文化でなくなっているかもしれないんです。そもそも文化というのは、文化を保護する人がいて。カルチャーに対して、サブカルチャーと言います。カルチャーは主流文化に対しての賛美なんです。要するに、狭い年齢ですよとか、すごく特殊な人達が守っているからサブカルチャーとかなんですけれども、我々が考えているものと時代の流れが置き変わっている。サブカルチャーと言われているものの方がカルチャーになってきているかもしれないんです。そこってものを我々は真摯に受け止めていかないと。うまい繋がり、コネクション、上手くリンクしていくと生命維持ができるのかなあと思っています。お祭りなんて究極のカルチャー、いやサブカルチャーなんです。楽しいと思う人は楽しいからやっているのです。元々あった神事からは相当かけ離れているんだけど、いろんな文化というのは、元々本来主流の文化であったはずの神事のところに、いろんなものが流入していきながら、実は脈々と生きていて、今は堂々たるカルチャーなんです。それもこの後どのくらい維持されていくかわからないですけど。そういうものっていうのが文化振興であったりとか、我々が楽しいと思っていくものなんですけど。言い方悪いんですけど、文化芸術は非常に多様なんです。持論ですが、文化のコアな担い手は千人に一人が良いんです。無理ですから。能楽をやっていく人間なんてもしかしたら一万人に一人しかいないかもしれないです。僕らの田遊び祭も、国の重要文化財に指定されたっていても担い手が大変なんです。もしかしたら千人に一人もいないかもしれない。市民八万人に対して、五十人くらいの文化財保存会の人達が続けていくのも大変なんです。

ど、やっぱり何とか文化を担っていく人達が少なくとも良いんで、その少なくなっていく人達をどう育てるのかと。もっとそれよりコアなファンは、百人に一人でも良いかもしれない。でも、それを良いと思ったり、面白いと思ったり、興味を持ったりする人はすごいたくさんいた方が良く思っています。どうしたら良いのかなあとあって、田遊び祭ってどうやったらみんなが興味を持ってくれるのかなあと。今の人達がちゃんと良いと思うものをうまく接点を作っていかなないと、これは歴史的に価値があるとか、これは歴史的に伝わってきているものだからというところだけだと、もしかしたら文化振興は難しいと最近自分が担い手の一人として思い始めているところです。市長に是非そういうところをやっていただきたいと思っています。

●溝口委員

森岡毅さんてお台場に体験型のを作ったりした人ですが、同じことを言っていました。今大阪万博をやっているけど、あまり盛況ではないと。もしあと1か月ですが、森岡さんに任せたら何とかしてくれますかという質問をしたら、なんて答えたかという、今やっている人達は40年くらい前のあの万博で成功した体験を持っている人で、あの人達が考えを変えてくれるんだったら引き受けますと。要は、違うんですと。だから、マーケティングをして、今必要なのがある何かというのをきっちり見れば、もっともっと集客することができるんだけど、そうではなくて、万博をやれば人が来るって考えている人があれをやっているんで、あれではうまくいきませんと同じことを言っていました。我々がそろそろ考え方を変えないといけない。もっともっと今必要としているものをきっちり見ないといけない。

●大谷委員

正倉院展はここ最近、10年、20年で非常にボルテージが上がっているらしくて、昔僕が若い頃見に行ってもそんなに人はいなかったです。その場でチケット買って入ったものが、今はその場でチケット買って入れないです。先にチケットを予約で買わないと。今回はオープニング前に行ったんですが、びっくりしたのは若い子や年配の人が普通に奈良時代とかの衣装のコスプレとかで来ているんですよ。ある時から考えの変換や置換があって、正倉院の宝物ってカッコ良いとかにいつからかなって、そういうカッコ良いものを見に行こうと置き変わってきているのかなあとあと思う中で、ありとあらゆるものが考え方の置き変わりだと思うんですよ。カッコ良いとか楽しいとかというところにうまく置き変わっていくと文化振興には良い。我々が何とも思っていないものが、外の人からはすごくカッコ良いものかもしれないですから、そこを探っていかなければいけない。柔軟性を持たなければいけないかなあと最近思ったところです。

●大場市長

文化とか歴史をどういう風に作りこんでいくかということは、行政がやる事では本来ないのではないかなとも思うんですよ。今カッコ良いというお話がありました。過去の成功体験に基づかない、今の人達に受けるものを提供していかないとだめだよということもありました。例えば、音楽にしても第一次世界大戦が始まる前のヨーロッパの人達にして

もクラシック。他には何もないから音楽が聴きたくて聴きたくてっていうところでホールへ行ったりオペラを聴いたりしたわけではないですか。日本だって、何も楽しみが無い中で、まち歌舞伎が来るといえば、公会堂に行ってそれを楽しみに一年に一回観たり、それを楽しみに行くと。それが文化を作ってきたと思うんです。今はそういうものが非常に少なくなって、喜びが多様になってきたから音楽なんて聴かなくなっちゃっていいやとか、演劇なんか一流の人が来るのよりゲームをやっていた方がいいとか。他の楽しみがたくさんあるがゆえに、例え一流のものであったとしてもその文化を敢えて取りに行こうとしない。行政がこれは素晴らしい人が来ますから、一万円するものを行政が無理して五千円にするから本物に触れてもらいたい、その世界の入口を覗いてもらいたいとやっても長続きしないと思うんですよ。今の人達が今流にカッコ良い、これって良いなあと思わないと本当の文化や歴史を作っていくようなものにはならない。例えばフィルムカメラがすごく流行っていると。一時期現像所なんて無くなったのがまた復活して、フィルムが手に入らない状態で人気だと。今流に綺麗に映るわけではない、鮮明、感動的なわけでもないと思うんだけどその味というか、醸し出す雰囲気、フィルム一枚一枚を心して撮らないといけな。そういう背景みたいなものを含めて今どきの人達には受けていると。大谷委員が言われたように、我々からすれば何でそんなと思うようなことに今の若い人達は興味を持っているのかもしれない。そういうことが新しい文化を作ったり、昔の文化を呼び戻したりしていくと思うんです。そこに行政がどういう風に関わっていくべきなのかっていうと限界がある。水を飲みたくない人に水を飲みなさいと連れていくようなものなので非常に難しさがある。とは言え、一流は一流で一度は接してみると良いよと、感性を豊かにすることも重要だし、本当に難しいところが正直あると思います。皆さんと共にそういったことも現実的にはある中、いろんな天秤をかけながら、これだけは最低限観てもらいましょうと。そこで千人に一人の子が目覚めてくれたら、それは非常に価値があることになるかもしれない。地域に繋がるお祭り文化をどういう風に残していくのかというようなことも皆さんと共に考えて、残せるものは残していかないといけない。私も大日出生なので大日のお祭りをどういう風に継いでいくのか、どういう風に喜んでもらうのか、それ一つだけとってみても課題だと思っています。ましてや、大谷委員からあった昨年国の重要無形文化財になった田遊び祭も、後継者がいくらでもいるでしょうと思えばいやもう本当に少なくて存続すら危ういという声も聞かれます。現実的に考えないと歴史・文化の分野も課題山積です。皆さんと共に考えていかなければならないところです。

時間も超過しているので、総括させていただきます。

「子育て」、「教育」、「歴史・文化」それぞれ課題を抱えていますが、今できることを精一杯子ども達のためにがんばってより良い環境を残していくこと、また今できることは精一杯対応していくこと、関係作りや対応や皆さんのお力をお借りしながら思いを聴かせていただきながらしっかりとそれを活かしていくことが大切だなあと思って答えのない世界ですし、手探り状態のところが多すぎて本当にたくさんあります。課題山積ではありますが是非教育委員の皆様にはお力添えをいただいて、子ども達のために今後も是非よろしくをお願いします。教育長からの補足をお願いします。

●鈴木教育長

行政としてどこまでお金をかけるかということが現実問題として非常に難しいなあと思っています。端的な話、子育てに優しい施策は全国でいろいろやっていて、例えば給食の無償化があります。あれをやると袋井市の場合五億円以上の持ち出しをしなければならない話になります。だけどそれが本当に子育てに優しいまちなのかと。全国で今それを標榜してやっています。つまり行政がどこまでお金をかけるのかが本当に私達にとって正解なのかと考えるといけない。お金も減っているし、人も減っている。担い手も減っている。なのに行政でしこたまお金を掛けますかといったら、多分長続きしないと思っていて、非常に悩ましいところだと思っています。お金を掛けずとももっと素晴らしい方法があるならばそれを取るべきだということを思っていて、さっきあった市民力とか、地域力とかというところがもしも機能できるならばそれが一番良い方法かもしれないなあと思いつながらもなかなか悩ましいです。最適解。みんなで話し合っただけでこれで行こうというようなことを突き詰めていけば良いかなあと思っています。当然教育委員の皆様、市長とも相談させていただきながら教育行政やまちづくりに努めていきたいと思っています。

4 閉 会

●石黒教育部長

様々な御意見ありがとうございました。事務局といたしましては、今後総合計画を作っていくのにあたってですね、今日宿題的なものも少しいただいたかなあと感じがあります。今日いただいた意見を、事務局では総合計画に活かせるような形で計画をしてまいりたいと思いますので、引き続き市の教育行政に関する御意見をいただくと共に、子ども達のために皆様も、いろいろなアドバイス等いただけたらと思います。それでは、以上を持ちまして第2回袋井市総合教育会議を終了させていただきます。本日はありがとうございました。

(午後 3 時06分閉会)